京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十二卷 第四號

昭和十六年四月

論叢

大島貞益とその思想……經濟學博士 本庄榮治郎

日本經濟の再生產機構の研究のために……經濟學博士 柴田敬

管子の經濟思想……經濟學士 穗積文雄

研究

アダム・スミスの自然的自由……經濟學士 白杉庄一郎

中小工業統制組織と金融問題……經濟學士 田杉競

輸出向絹織業の確立……經濟學士 堀江英一

說苑

所得の分配と累進稅……經濟學博士 汐見三郎

モンテスキューの經濟思想……經濟學士 河野健二

梁漱溟の村治論……經濟學士 菊田太郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

研究

アダム・スミスの自然的自由

白杉庄一郎

一

アダム・スミスは周知の如く「自然的自由の體制」を以て理想的な政治經濟體制となした。自然的自由とは何であらうか。それはスミスの道德哲學の中に深い根柢を有するやうに思はれる。『道德情操論』の中に見られるスミスの經濟的自由主義の世界觀的基礎について若干の考察を進めて見たいと思ふ。

スミスの道德哲學の根柢にある根本の立場は、屢々指摘されてゐる如く自然神學すなはち理神論であつた。スミスの法律・政治および經濟思想の基調となしてゐたのは言ふまでもなく、グロティウス以來の自然法の思想であつたが、然しスミスの場合自然法の思想を基礎づけてゐたのは理神論的世界觀であつた。理神論は啓蒙時代に廣く西歐諸國に行はれた思想であるが、啓蒙思想の母國イギリスに於ては、ハーバートを祖とし、ブラウントやロック等もまたその先驅者と考へられるのであるが、就中十八世紀に入つてからニュートンの物理神學的證明と相俟つてトーランド、ティンダル、コリンス、ボーリングブローク等の所謂自由思想家が輩出した。然し中でもス

ミスの思想の發展にとつて最も重要なのはシャフツベリーおよびハチエソンの方向であつて、理神論的世界觀はシャフツベリーによつて道德的世界に適用されて獨特の展開をとげ、それがハチエソンを經てスミスに至つたと考へられる。

思想史的聯關は措いて、スミスの著書に現れてゐる限りに於て問題にして行けば、スミスは世界を次の如く把握する。即ち、「神の慈悲心と智慧が永劫の昔から常に最大の幸福を生み出すために宇宙といふ巨大な機械を考案し運轉して來た。」と。或はまた、「宇宙の全住民は、最も卑賤なものも最も高貴なものも、自然の全運動を指導し、自分自身の不變の完全性によつて常に世界の最大幸福を維持しようと決意せるかの偉大にして慈悲深き全智全能者の直接の配慮と保護の下にある。」[1]と。すなはちスミスは宇宙の創造者として神を想定した。宇宙は神によつて作られた一個の大きな機械の如きものである。そして、宇宙は機械と同樣に製作者によつて豫め定められた目的による調和を保つてゐる。我々はスミスに於ても所謂豫定調和の信仰を見出すのである。例へば彼はかう言つてゐる、「宇宙のあらゆる部分に於て我々は諸々の手段が惹起すべく意圖された諸々の目的に極めて巧妙に調整されてゐるのを觀る、そして植物または動物の機構に於て我々はあらゆるものが個體の保存と種の增殖といふ自然の二大目的を達成するやうに工夫されてゐるのに驚歎する。」[2]と。もつとも、宇宙の目的は、機械のそれが人間によつて附與されたのであるのに對して、宇宙の創造者たる神の把持するところであるといふ相違がある。而して宇宙の作られた目的はその中の全存在の繁榮と幸福である。

宇宙の創造者たる全智全能の神が時に自然と呼ばれるが、然しスミスが自然といふのは多くの場合神によつて創造された宇宙を構成する個々の創造物であつた。そして後の意味の自然に對して神は「自然の創造者」(the Author

1) Moral Sentiments. 6th ed., Part VI, Sec. II, Ch. III.
2) ibid. Part II, Sec. II, Ch. III.

of nature) と呼ばれる。神としての自然と神によつて作られた自然との區別は所謂能產的自然と所產的自然との區別に相應すると云へよう。自然は神によつて作られたものであり、神の意圖の實現されたものであつた、スミスは「自然のあらゆる部分は、注意深く見渡すと、一樣にその創造者の神慮 (prudential care) を表現する」[3] とも言つてゐる。從つて自然はそれ自體善なるものである。そしてそこにスミスの世界觀が樂觀的理神論だと云はれる所以があるのである。

同じことは人間についても言はれる。人間もまた宇宙の住民として神の創造した自然の一部分にほかならないからである。實際、被創造物なかんづく人類の幸福が自然の創造者の世界創造の目的であるといふのが、スミスの道德哲學の根柢を形成する根本信念であつた。

「人類および爾餘一切の理性的創造物の幸福は、自然の創造者がそれらを存在せしめた時、自然の創造者によつて意圖された本來の目的であつたやうに思はれる。それ以外の如何なる目的も、我々が必然的に自然の創造者に歸する最高の智慧や神的仁慈に値しないやうに思はれる。創造者の無限の完成といふことを抽象的に考察することによつて我々が懷くやうになるこの見解は、自然の仕事——それは總て幸福を增進し不幸に對して保護することを目的としてゐるやうに思はれるのであるが——を調べて見ることによつて一層よく確證される。而して我々の道德的能力の命令に從つて行爲することによつて我々は必然的に人類の幸福の增進に最も有效な手段を追求するのであり、從つて或る意味に於て神に協力し、我々の力の及ぶかぎり神の計畫 (the plan of Providence) を推進めるのであると言へる。反對に我々はそれと異つた行爲をなすことによつて世界の幸福と完成のために自然の創造者が確立した計畫を或る程度妨害し、或る程度いはゞ神の敵であることを宣言するやうなものであると思はれ

3) ibid. Part II, Sec. II, Ch. III.

る。こゝから我々は自然に第一の場合には神の特別の恩惠と褒賞を希望し、第二の場合には神の確實な報復と處罰を恐れるに至らしめられるのである。[4]」

被創造物なかんづく人類の幸福が「神の計畫」であり、その實現に對して神に協力するといふところに人類の道德的行爲の意味がある。このやうに、自然の創造者の目的は被創造物なかんづく人類の幸福なのであるが、然らば幸福とは一體何であらうか。我々はこゝでスミスの幸福觀を尋ねて若干脇路へそれる。

二

スミスは或る個所で、「幸福は平穩 (tranquillity) と享樂 (enjoyment) にある。平穩なくして享樂はあり得ない、そして完全な平穩のあるところ享樂し得ないものは殆んどない。[5]」と言つてゐる。この幸福觀に於て平穩といふのは內的精神的側面を云つたものであり、享樂といふのは外的物質的側面を云つたものと解して大體誤りはないであらう。[6] また別の個所では「人生の眞の幸福」は「身體の安易と精神の平和」にあると考へてゐたやうにも解されるのであるが、[7] これも大體同一の思想だと云ふことが出來よう。

スミスの幸福觀が精神的要素と並んで物質的要素を含んでゐるといふことには重要な意味がある。蓋しそこに中世の宗教的禁慾主義に反抗して古代のギリシヤ的現世主義へ復歸しようとするスミスの道德哲學の根本の立場が讀み取られ得るからである。古代の道德哲學の研究對象は「人間の幸福と完成」であつた、そこでは德の完成は必然的にそれを所有する人々に現世に於ける最も完全な幸福を齎すものと考へられた。然るに道德哲學が神學に隷屬せしめられた時、德の完成は現世に於ける幸福と一般に或はむしろ殆んど常に一致しないと主張された。人間生活は主として來世の幸福といふ觀點から考察され、決疑論と禁慾道德が道德哲學の主要部分を構成するに

4) Moral Sentiments, Part III, Ch. V.
5) ibid. Part III, Ch. III.
6) 藤井健治郎、アダム・スミスの根本思想に就いて、大正十四年、藤井博士全集第五卷第一分冊、五四、五六頁。

至つた。これをスミスは道德哲學の墮落と斷じた。[8] 彼の道德哲學が據つて立つ根本の立場は古代ギリシヤのそれに見られる現世主義であり、且つこの現世主義にもとづく外的物質的な幸福の尊重が彼をして經濟學の研究へ驅り立てゝ行つたと考へられるのである。

併しながら、同時に我々はスミスの物質的幸福に關する見解が極めて樂觀的であつたことに注意しなければならない。彼は或る個所で言つてゐる、「健康で借金もなく曇らぬ良心をもつた人の幸福にその上何がつけ加へられ得るであらうか。かうした狀態にある者にとつては、財產の增加などといふことは總て餘計なことゝ言つてよからう。……しかも、かうした狀態は實に人類の自然かつ普通の狀態であると言つてよいのである。現在世の中は不幸にみち墮落してゐると歎かれてゐるが——そしてその歎きは十分根據のあることであるが——それにもかかはらず、實際は右の狀態が大部分の人々の狀態なのである。」[9] と。さらに彼は、「全世界を平均的に考へて見るがよい、苦痛または不幸に苦む者一人に對して二十人は順境にあつて喜び又は少くともかなりの境遇にあるであらう。確かに我々は二十人と共に喜ぶよりはむしろ一人と共に泣くべき理由を擧げることは出來ないのである。」[10] とさへ言つてゐる。また彼は別の個所では「神が土地を少數の地主の間に分けた時、神は分割にもれたやうに見える人々を忘れたのでもなければ見捨てたのでもない。これらの人々もまた土地が生產する總てのものゝ分前を享有するのである。人生の眞の幸福を構成するものに關しては、彼等は如何なる點に於ても、彼等より遙か上だと思はれるかも知れぬ人々に劣りはしない。身體の安易と精神の平和に關しては、總ての異つた階級が同一の水準にある、公道の傍で日向ぼつこする乞食も國王がそれを得んとして戰ふ安全をもつてゐるのである。」とも言つてゐる。[11] このやうなスミスの著書の隨所に見られる調和的樂觀的な人生觀は、當時のイギリスの比較的平和で富

7) Moral Sentiments. Part IV. Ch. I.
8) Wealth of Nations. Cannan's ed. Vol. I. p. 259.
9) Moral Sentiments, Part I, Sec. III, Ch. I.
10) ibid. Part III, Ch. III.
11) ibid. Part IV, Ch. I.

裕な社會狀態の反映であり、かつスミス自身の圓滿な人格の表現であつたと共に、彼の理神論的世界觀の歸結でもあつた。現世に於ける人間の物質的幸福もまた神の意志に他ならないと考へられたのである。

然らば、現世の幸福に對する右の如き樂觀的な態度から、「國民を富ますこと」を最高目標とするやうな經濟學の建設がどうして必要または可能であつたのであらうか。確かに我々はかう疑ふことが出來さへするやうに思はれる。然しスミスが「財產の增加」を目的とする富の追求を是認したのは、單に道德哲學の對象が「人間の幸福と完成」であり而もその幸福が物質的なものを含むからといふだけの理由かではなくて、一つは富の追求を媒介として德が實現されると考へたからであり、今一つは利己的活動を媒介にして社會の幸福が增進されると考へたからである。第一の點については嘗て述べたことがあり、[12] 今問題にしようと思ふのは主として第二の點であるが、前者についてスミスの世界觀との關聯に於てなほ若干の考察を進めて見たい。理神論的世界觀に媒介されて第一の點は第二の點へ導いて行くであらう。

三

スミスは、自然の創造者の世界創造の目的が、被創造物の幸福であるといふ確信を基礎として、現世に於ける幸福は道德上の德と一致すると考へる。

「もし我々がこの世で外的な順境と逆境(external prosperity and adversity)とが普通分配される一般的準則を考へるならば、この世に於ける萬事が置かれてゐるやうに見える無秩序にもかゝはらず、やはりこの世に於てもあらゆる德は自ら、その適當な褒賞すなはち德を奬勵し促進するに最も適當な褒賞と合致する、そしてこのことはまた極めて確實なことであつて、德を全く失望せしめるには異常な諸事情の共働を必要とする程である、といふこと

12) 拙稿、道德情操論の研究、經濟論叢、第五〇卷第六號、アダム・スミスに於ける正義の觀念、同第五一卷第五號。

を我々は知るであらう。勤勉や分別や深慮を奬勵するに最も適當な褒賞は何であるか。あらゆる種類の事業に於ける成功である。人生全體をとつて考へ見て、これらの德が成功を得そこなふといふことがあり得るであらうか。富と外的名譽はそれらの適當な報酬であり、それらが得そこなふといふことはめつたにあり得ぬ報酬である。誠實や正義や仁愛の實行を促進するに最も適した褒賞は何であるか。我々が共に生活する人々の信任や尊敬や愛である。[13]」

現世に於ける幸福が德と一致するといふのが「神の計畫」である。この計畫はまた右に續くすぐ次の個所で「事物の自然の成行」(the natural course of things) とも或は「事物の普通の成行」(the common course of things) とも呼ばれてゐる。ところで、神の世界創造の目的は世界の幸福である。從つて事物をしてその自然の成行に委せることが、神の計畫を實現し人類の幸福を增進する所以となる。こゝにスミスの所謂自然的自由の思想の根本的な基礎づけが見出される。然し彼は決して人間の實踐を否定したのではない。人間の實踐を單に神の計畫の實現に協力するといふ意味に於てのみ認めたのではない。彼は既に或る個所で、「人間が作られたのは行爲のためであり、彼の諸能力の發揮によつて自分自身および他の人々の外的境遇に萬人の幸福に最も好都合であるやうに思はれるやうな變化をもたらすためである。」と言つてゐる。[14]

のみならず、彼はさきの論述に引續いて現世に於ける幸福が德と一致するといふのは、我々が云はゞ自然の創造者の立場にまで高まつてその意圖を洞察する場合に初めて、言ひ換へると哲學的洞察を俟つて初めて言へる事柄であつて、人間そのものゝ立場からは事物は必ずしもそのやうに調和的に見えるものではないとして、言ふ。「然し順境と逆境とが普通分配される一般的準則は、この冷靜にして哲學的な光で考察する場合には、この世に

13) Moral Sentiments. Part III, Ch. V.
14) ibid. Part II, Sec. III, Ch. III.

於ける人類の境遇に完全にふさはしいものであるやうに思はれるけれども、而もそれは決して我々の自然的情操のあるものにはふさはしくない。若干の德に對する我々の自然的な愛好や歎賞は我々がそれにあらゆる種類の名譽や褒賞を――それらの德が必ずしも伴つてはゐない他の性質の適當な褒賞と認めなければならないやうな褒賞をさへ――附與したいと思ふほどである。……大度や寛容や正義は高度の歎賞を支配するのであつて、我々はそれらの德に、分別や勤勉や丹精の自然的結果であり、これらの德と不可分に結びついてゐる性質たる富や力やあらゆる種類の名譽を與へたいと思ふほどである。……勤勉な惡漢が土地を耕し、懶惰な人がそれを放つて置くとする。誰が收穫を刈取るべきであるか。誰が餓え、誰が豐に生活するか。事物自然の成行はそれを惡漢に有利なやうに決定する。人類の自然的情操は有德者に有利なやうに決定する。前者の善良な性質はそれが彼に齎す利益によつて酬はれて餘りにも過大な報酬を受け、後者の怠慢はそれが自然に彼に齎す不幸によつて餘りに酷く罰せられすぎると、人間は判斷する。そして人類の情操の結果たる人類の法 (human laws, the consequences of human sentiments) は勤勉にして用心深い叛逆者の生命や財產を沒收する、そして異常な報酬によつて無分別にして不注意ではあるが善良な市民の誠實と公共心に褒賞する。かくして人間は自然に命ぜられて、然らざれば自然自體がなしたであらう事物の分配を或る程度訂正する。このために自然が人間をして從はしめる準則は自然自體が從ふ準則とは異つてゐる。自然はあらゆる德およびあらゆる惡に、前者を奬勵し後者を抑制するに最も適した褒賞または處罰を附與する。自然はたゞ單にこの考慮によつて支配され、功績や罪過が人間の情操や激情の中でもつてゐる樣々の度合については殆んど考慮しない。これに反して人間は後者にのみ考慮を拂ひ、あらゆる德の狀態をして彼自身がそれに對して認める愛と尊敬の度合に又あらゆる德の狀態をして輕蔑と嫌惡の度合に精確に比例せ

しめんとする。自然が從ふ準則は自然にふさはしく、人間が從ふ準則は人間にふさはしい。而して兩者は共に同一の大目的すなはち世界の秩序と人間性の完成と幸福を促進するものであると考へられる。[15]」

自然の創造者が人類社會を創造した目的は人類社會の幸福だと考へられるのであるが、而も個々の場合を考へると各人の幸福は必ずしも「事物の自然の成行」に從つて實現されるのではない。人間が自然に賦與されてゐる道德的能力に從つて幸福に値すると判斷する人物が「事物の自然の成行」に從つて必ず幸福だとは限らない。そこでスミスは「事物の自然の成行」に對して或る程度の訂正を加へるといふ意味に於ける人間の能動的な實踐を認めて來たのである。人間の實踐は先づ第一には「事物の自然の成行」に從つて神の計畫に協力するところにあるのであるが、さらに第二には「事物の自然の成行」に一種の修正を加へるにある。こゝに於て「事物の自然の成行」すなはち「自然の從ふ準則」に對して「人間の從ふ準則」すなはち「人類の法」が重要な意味をもつてくる。「自然の從ふ準則」と「人間の從ふ準則」との區別は所謂自然法と人定法との區別に照應する。スミスは自然法に對する人定法の修正的意義を認めてゐるのであるが、この點はスミスの自由主義を理解する上に或る程度の重要性をもつ事柄ではないかと考へられる。彼は重商主義的な國家統制を排擊したけれども、決して國家統制一般を否定したのではない。このことは「自然的自由の體制」に於ても國防・司法行政および或る種の公共事業が主權者の缺くべからざる義務とされてゐたことを思へば明かである。自然的自由といふも正義の法を犯さゞる限度内に於てのことであつたのである。[16] 國家統制を「事物の自然の成行」に合致せしめることが彼の自由主義の本意であつたと解されるのである。

併しながら、右の如き意味に於ける人間の實踐を認めた場合にもなほスミスの自然主義の立場は一貫してゐ

15) ibid. Part III, Ch. V.
16) 前掲拙稿、アダム・スミスに於ける正義の觀念。

る。卽ち「事物の自然の成行」に對して一定の修正を加へる「人類の法」は人類の情操の結果ではあるが、然し人類の情操そのものが自然によつて賦與されたものであつて、「人類の法」も畢竟自然によつて命ぜられ自然が人類をして從はしめる準則にほかならない。この面から見れば兩者は共に自然の秩序の兩面であり、同一の目的すなはち「世界の秩序と人間性の完成と幸福」を促進するものなのである。のみならず、「事物の自然の成行」に對する人間の修正には重大な限界が存在する。卽ち、「事物の自然の成行は人間の無力な努力によつて全部統御されるといふことは出來ない、流れは餘りに早く餘りに强くて人間はそれを止め得ないのである。」[17]

「事物の自然の成行」に對する人間の無力といふことからスミスは道德を宗教と結びつける。然し政治經濟の領域に於て彼がそれから導き出して來た結論は事物をしてその自然の成行にまかせるといふことであつた。然しこの場合にも、自然の成行が神の意志であるといふことの信仰には變りがなかつたのである。

四

自然の創造者が人間を作つた目的が本來人間の幸福である。人類はもともと意識するとせざるとに拘らず、欲すると欲せざるとに拘らず、自然の本能乃至欲望を追求することにこの目的に協力するやうに作られたのである。スミスは人間の欲望や本能の中に自然の創造者の神慮を發見する。

「その特別の重要性の故に——もし次のやうな表現が許されるならば——自然の大好きな目的 (the favourite ends of nature) と考へられ得るやうな總ての目的に關して、自然は絶えず自然が企てる目的に對する欲望を人類に賦與して來たのみならず、またそれによつてのみこの目的が實現され得る手段に對する欲望を目的實現に對するその傾向とは獨立に手段そのものゝために賦與して來た。かくして自己保存および種の增殖は、自然が一切の動物の

17) Moral Sentiments. Part III, Ch. V.

形成に際して企てゝ來たやうに思はれる大目的である。人類はそれらの目的に對する欲求とその反對物に對する嫌惡、卽ち生の愛好と死の恐怖、種の永久存續に關する欲求とその絕滅に關する嫌惡とを賦與されてゐる。然し我々はこのやうにそれらの目的に對する極めて强烈な欲求を賦與されてゐるけれども、それらの目的實現の最も適當な手段の發見は我々の理性の遲鈍にして不確實な決定に委託されては來なかつた。自然はこれらの手段の大部分を本源的にして直接的な本能 (original and immediate instincts) によつて我々に敎へる。饑渴や兩性を結びつける激情や快樂の愛好や苦痛の恐怖は我々をしてそれらの手段を手段そのもののために適用せしめるのであつて、その際我々は自然の偉大な管理者 (the great director of nature) がそれらの手段によつて生產しようと企てた惠深い目的に對するそれらの手段の傾向については何ら考慮しないのである。」[18]

人間は自然によつて賦與された本能を追求することによつて、彼の意識を超えた自然が設定した大目的を實現する。この確信こそは、スミスの場合、人間の利己活動が無自覺的に社會の福祉を增進するといふ思想の據つて來る根柢であつたのである。而してスミスは、自然乃至神が人間をしてその本能を追求せしめることによつて人類全體の福祉を增進するのを自然の「狡智」(deception) と呼んでゐる。自然は人類の福祉を增進するために各人の利己活動を媒介とする、換言すれば人間を欺いて利己の追求に從事せしめるのである。

「有難いことには、自然はこのやうにして我々を瞞すのである。この狡智こそが人類の勤勉を呼び起し絕えず運動せしめるのである。これこそが人類を促して先づ土地を耕さしめ、家を建て都市や國家を建設し人間生活を高貴にし美化する一切の學問や技術を發明し改良せしめるのである。學問や技術は地球の表面を全く變化せしめ、原始林を豐饒快適な平原に變へ、人跡未踏不毛の大洋を新しい生活資源となし、地球上の樣々の國民との交通の

18) ibid. Part II, Sec. II, Ch. I, note.

大公道たらしめた。地球は人類のこれらの勞働によつてその自然的豐度を二倍にし、より多數の住民を養ふやう餘儀なくされて來た。高慢で無情な地主が廣い農場を見付け、同胞の窮乏を考へないで、そこに出來る全收穫を想像上自ら消費しようとしても甲斐のないことである。目は腹より大きい (the eye is larger than the belly) といふ素朴にして卑近な諺は地主の場合に最もよく當てはまる。彼の胃の腑の能力は彼の廣大な欲望と何らの比例を保つものではなく、最も卑賤な農民のそれ以上の受容力をもたない。彼は殘餘を、彼自身が使用する少量の部分を最も入念に調製する人々や、この少量の部分がそこで使用される堂々たる邸宅を準備する人々や、貴人の家庭で使用される樣々の玩具や裝身具の一切を調達し調整する人々に、分配することを餘儀なくされる。かくしてそれらの人々は總て地主の贅澤や氣まぐれから、彼等が地主の仁愛心(ヒューマニティ)や正義心(ジャスティス)に期待しても得られなかつたであらう生活必要品の分前を獲得するのである。土地の生産物は常にそれが養ひ得ると殆んど同じだけの住民を養ふものである。富者は澤山の中から最も貴重で快適なものを選ぶにすぎない。富者は貧者より少し多く消費する。そして彼等の自然的な利己と强慾にもかゝはらず、また彼等は彼等自身の便宜を意圖するにすぎないのであるけれども、さらに總て彼等が使用する數千の人々の勞働から彼等が企てる唯一の目的は彼等自身の無益で貪婪な欲望の滿足であるのだけれども、彼等は彼等の改善の一切の生産物を貧者に分けるのである。彼等は見えざる手 (an invisible hand) に導かれて、もし土地がその總ての住民の間に平等に分たれてゐたならばなされたであらうと殆んど同樣に生活必要品を分配し、かくしてそれを目的とせず知らずして社會の利益を推進め、種の增殖手段を提供する。神(プロヴィデンス)が土地を少數の地主の間に分けた時、神は分配にもれたやうに見える人々を忘れたのでもなければ見捨てたのでもない。これらの人々もまた土地が生産する總てのものの分前を享有するのである。[19]」

19) ibid. Part IV, Ch. I.

こゝに我々は『國富論』に見られる利己心是認の根據が極めて簡潔に而も包括的に與へられてゐるのを見る。「利己と强慾」は「見えざる手」に導かれて、「仁愛心や正義心」に期待しがたい社會の利益の增進に貢獻するのである。そこに利己活動が無自覺的にではあるが社會の福祉を增進する極めて重要な契機として肯定さるべき根據があるのである。而してその際我々は、被創造物の幸福を目的とする慈悲深き自然の創造者が「見えざる手」として想定されてゐることに注意しなければならぬ。「見えざる手」といふのは『國富論』に於てもスミスの根本思想を示す重要な言葉の一つとなつてゐるが、それは理神論の立場から自然の創造者と考へられる神のことにほかならなかつたのである。自然の創造者は人類の幸福を增進するために人間に利己心を賦與した。從つて利己心は決して惡と考へらるべきものではなくて、自然の創造者がその目的を實現するために人類に賦與した手段にほかならない。かう考へることによつて初めて、即ち「見えざる手」を想定することによつて初めて私益即公益といふ立言が可能となり、それによつて自然的自由の基礎づけが完成する。即ち、諸個人の利己活動は、良心の命ずるところに從つて正義の法を犯さゞる限り、「見えざる手」に導かれて無自覺的に社會の幸福を增進する、私益は公益と一致するのである。而して人類の利己活動が「見えざる手」に導かれて實現する經濟秩序の總體が『國富論』に謂ふ所の「自然的自由の體制」にほかならない。自然的自由とは、「あらゆる人間は疑ひもなく自然の委託を受けて先づ第一に且つ主として自分自身のことに氣をつける。そしてあらゆる人間は他人のことよりは自分自身のことに氣をつけるのに適してゐるから、さうあるのが適當でもあり正當でもある。」[20]といふところから、良心の命ずる所に從つて正義の法を犯さゞる限度內に於て許容される利己活動の自由である。而して諸個人の利己活動が「見えざる手」に導かれて社會の幸福を增進するといふことは、スミスの場合、單に未來に構想される理想的な經

20) ibid. Part II, Sec. II, Ch. II.

濟體制の機構といつたものではなくて、それは同時に經驗的に論證され得る「事物の自然の成行」でもあつた。從つて「自然的自由の體制」は當時成立しつゝあつた近世市民社會の「自然の成行」に沿つて構想されたその將來形態であつたのである。この經驗科學的な立場に理神論的世界觀が結びついて、自然そのものが善なのであつて、人類の自然的努力は種々の人爲的攪亂にもかゝはらず人類の幸福を增進して來た、それを一層促進するために人爲を捨て、事物をしてその自然の成行に委せよといふのが、スミスの自然的自由主義の骨子であつた。

右の如く、スミスの自由主義の世界觀的基礎は『道德情操論』の中に、そしてその中にのみ、求められ得るが、然しそこではまだ理神論的世界觀は政治經濟上の自然的自由の思想にまで具體化されてゐない。それが纏つた形で出てくるのは言ふまでもなく『國富論』に於てゞある。けれども、スミスの自然的自由の思想が『國富論』以前いな『道德情操論』の出版に先立つ遙か以前に胚胎してゐたことは、つとに傳記作者の指摘してゐるところであつて、『道德情操論』の論述はそれを豫想し、それに對する基礎づけの意味をもつてゐたと考へることが出來るであらう。このことは今一つの觀點からも言へる。

五

自然の創造者たる「見えざる手」が自然的自由の理念の形而上學的支柱となつてゐることは右の如くであるが、「見えざる手」といふ表現は『哲學論文集』(Essays on Philosophical Subjects) に收められてゐる『哲學的研究を指導する諸原理の天文學の歷史による說明』といふ論文——この論文は『論文集』の編纂者の傳へるところによると『道德情操論』の第一版よりも早く書かれたものである——の中にも見られる。而してそこでは「見えざる手」は「自然の事象がそのまゝに放任されるならば取るであらう成行」または「ひとりでに行はれる事物の自

然の成行」の支持に從事するものとして觀念されてゐる。[21] 言ひ換へると、それは秩序や法則の究極原因と考へられてゐるのである。そこで、「見えざる手」をこの側面から考へると、それは哲學的研究——といふのはこゝでは哲學および科學を含めて學問的研究といふほどの意味であるが——と關聯をもつて來る。蓋し、「見えざる手」は秩序や法則の原因であるが、その秩序や法則の發見が哲學の課題にほかならないからである。即ち彼は同じ論文の中で、哲學は「自然の結合原理に關する學」(the science of the connecting principles of nature) であつて、ばらばらの對象を結びつける見えざる鏈を提供することによつて、軋つて調和せぬ混沌たる現象に秩序をもたらすものである、而もその結合原理は「總ての人類によく知られてゐるやうなもの」でなければならぬ、としてゐる。[22] 勿論これは自然哲學に關して言はれたことである。然しそれはそのまゝ道德哲學にも適用されたやうに思はれる。即ちスミスは總ての人々によく知られてゐる原理たる同情を結合原理として倫理學を構成し、利己心を結合原理として經濟學を建設したのである。[21] 經濟學だけについて述べると、スミスは理神論的世界觀に基づいて經濟生活の中に「見えざる手」の創造し支持する秩序を求めた、そしてその秩序を解明する結合原理を利己心に於て發見した。利己心を動機とする人間の活動は「見えざる手」に導かれて自己を超えた客觀的な秩序を實現する。それがほかならぬ「事物の自然の成行」である。ところで、經濟生活に於ける「事物の自然の成行」は利己活動の自然的自由が前提される限りに於て實現される客觀的な經濟秩序である。而もこの秩序の創造者ないし支持者として想定された「見えざる手」は被創造物の幸福を念願する自然の創造者にほかならなかつたが故に、この秩序は人類の幸福の實現される樣式としてそれ自體善なるものであり、且つ現實に實現さるべきものであつた。かくして、さうした秩序の總體として「自然的自由の體制」を理想的な經濟體制として定立し、その下に人類が「見

21) The Principles which lead and direct Philosophical Inquiries, as illustrated by the History of Astronomy. The Essays of Adam Smith, London 1869, pp. 339—340.
22) ibid. pp. 336, 337.

えざる手」に導かれて實現するであらう秩序を究明し、その實現に協力すること、それがスミスに於ける經濟學の根本的課題となつたのである。この課題を解くために彼は『國富論』を書いたのであるが、『國富論』を貫く根本思想は自然の本能に從ふ人間の經濟活動が無自覺的に社會の利益を增進する、少くとも自由が確立されてゐる限りさうだといふ點にある。この意味に於てスミスの經濟學は理神論的世界觀を基礎とする自然的自由の理念を前提して初めて成立し得たといふことが出來るであらう。

かくして成立したスミス經濟學の重要な歷史的意義については、こゝに喋々するを要しないであらう。こゝで言ひたいと思ふことはたゞ、スミスに始まる自由主義なりし個人主義の經濟學を超えるためには、そしてそのためには先づその始祖たるスミス自身に歸つてさうすることが必要であらうが、そのためには自然的自由の理念を核心とするスミス經濟學がその世界觀にまで溯つて根本的に批判されねばならぬ、といふことである。スミスの自然的自由の理念を基礎づけてゐる理神論的世界觀は自然科學的であるのみならずキリスト教的であり、非實踐的にして個人主義的であるといつた點に問題をもつと考へられるが、それらの點について詳しくは他日を期したいと思ふ。

23) J. Bonar, Philosophy and Political Economy, London 1909, 2nd ed. p.150.